

被災地サービスラーニングのリベラルアーツとしての意義

代表者 齊藤くるみ

共同研究者 菱沼幹男

I. はじめに (齊藤くるみ)

本研究は大災害という究極の状況で、人は何をなすか、何をなすべきか、また被災地の支援や防災教育がリベラルアーツの視点で何を教えてくれるかを考察し、被災地ボランティアを通して学生にサービスラーニングの機会を与えることの教育的意義を明らかにするものである。

サービス・ラーニングとリベラルアーツの関係はアメリカでは 1990 年代から注目されていたが (Sigmon1996, Barber & Battistoni1993)、最近では Chmiee-Wright ら (2015) が “civil society incubators” と呼び注目したり、Gearan ら (2011) が citizenship & democracy の視点で論じている。

日本ではサービス・ラーニングとは大学の授業で学んだ知識と技能を用いて、自発的に国内外の実社会の諸課題を解決する社会的活動 (NGO、大学、政府) に関わることで市民としての責任や社会的役割を自覚しつつ、学生が実践知を獲得することを促し、さらにその実践知を授業の中で研究教育を通して学問地として深めていく教育プログラムとして、文部省大学教育部会において、多くのプログラムに助成金を付け、推進している。現在多くの大学で注目されており、筑波大学、立命館大学、東洋大学、ICU、日本福祉大学などでプログラムが実施されている。

東日本大震災、熊本地震、ネパール地震等の各地での活動を継続的に学生に行わせる。事前学習には被災地についての多角的な事前研究、コミュニケーション能力の改善 (英語含む)、調査の方法等を含む。さらに現地での安全確保のための現地受け入れ機関との協議、保険などの設定についての知識を得る。

事後学習としては学生間の評価を実施し、その後の学習や制度改善のためのリフレクションに結び付けてゆく。そして災害の中での人々の生き方、宗教・思想等も含め、多角的な知識と思考を養う。特に、災害弱者、すなわち子どもや高齢者、障がい者、外国人と災害リスク予備リスクマネジメントを考えることで、多様性を実感し、真のリベラルアーツ教育を目指す。

本研究チームは、サービスラーニングについての研究に実績がある (齊藤・西田 2016、梶原・菱沼他 2008)。同時に菱沼は過去「ボランティア論」の授業にサービスラーニングを取り入れたり、東日本大震災の被災地支援活動を継続的に行っている (菱沼 2013)。齊藤・西田はフィリピンの巨大台風の被災地レイテ島で、聴覚障がい者のグループ等との交流を通して調査を行い、レイテ島の被害が大きかった理由にやはりコミュニケーションの問題があったこと、避難後も障がい者は親族が面倒をみるべきという伝統が公的な支援を阻んでいることを明らかにした。スマトラ沖地震最大の被災地インドネシアのバンダアチェでも、ほとんど被害のなかった隣の島 (シムル島) と比較して、コミュニケーションの障壁や語り伝えの不在が深刻な被害の要因となったことを明らかにした (齊藤・西田 2015 他)。田村も震災直後に子どもたちに絵本を贈る活動や教職課程の学

生に被災地での研修を継続的に行っている(田村 2012)。またパネルシアターを使った被災地支援の研究も行っている(田村 2013)。さらに斉藤は平和中島財団のアジア地域研究助成にてアジア 5 か国でのリスクコミュニケーションについて研究し(斉藤 2016)、2018 年より三菱財団社会福祉事業・研究助成「アジアの被災地を結ぶ聴覚障害者支援ネットワークのモデル構築とツール開発」を開始する。

本研究は上記のように被災地研究と大学教育におけるサービスラーニングの研究に実績のある教員がチームを組み、リベラルアーツ教育におけるサービスラーニングの意義を探るものである。(文責 斉藤くるみ)

II. 被災地でのボランティア活動を通じた学生達の学び(菱沼幹男)

1. 研究の目的

日本社会事業大学災害支援ボランティアセンターは、2011 年 3 月 11 日に発生した東日本大震災を機に設置され、学長をセンター長としてこれまで宮城県気仙沼市や東松島市での学生ボランティア活動を支援してきた。2017 年 4 月からは大学ボランティアセンターへと改組されたが、学生が主体となった気仙沼でのボランティア活動は続けられている。

当初、活動の内容は、気仙沼市社会福祉協議会からの紹介による片付け作業が主であったが、公園の汚泥清掃に携わった学生達が「子ども達が遊べる場所が限られている。子ども達に楽しい時間を届けたい」と考えて、クリスマス会を企画したことをきっかけに、児童館や学童保育室での子ども会活動が主となって、年間 2 回から 3 回の活動が行われてきた。

初めて参加する学生達は、被災した子ども達とどのように接すればよいのか、自分達の活動は本当に意義のあるものなのか等、不安や戸惑いを抱えながら現地を訪れることが多かった。しかし、子ども達と接する中で、活動を継続していく理由をそれぞれに見出し、活動の継続につなげてきた。一方で震災から月日が経ち、生活ニーズは変化し、最初に訪れた時に小学 1 年生だった子は卒業し、中学生となっている。子ども会活動を始めた大学生達も卒業し、後輩が引き継いでいる状況にある。こうしたことから、いつまで続けるのかという声が周囲から聞こえてくることもある。子ども会活動を行うにあたっては、現地の様子を見学したり、話を聞くというプログラムも重視し、子ども達が楽しく過ごせる時間を作ることに加えて、活動を通して被災地の現状や被災地支援のあり方を学生自身が考えるスタディツアーとしての意味合いも大きくなっている。

筆者はこれまで災害支援ボランティアセンターの立ち上げ時から継続的に学生達の活動の支援に携わってきた。今回、改めて気仙沼での子ども会活動に参加している学生達の声から、学生達が活動を通して、何を感じて、何を学んでいるのかを探り、サービスラーニングとしての被災地でのボランティア活動について考えたい。

2. 研究方法

2017 年 8 月 21 日～22 日にかけて気仙沼市での子ども会活動に参加した学生 17 名にアンケート調査を実施した。調査項目は、活動に参加した理由、活動を通して自分の成長につながったと感じること、活動に参加した感想である。

学生達には調査の主旨を口頭で説明し、了承を得た上で行った。回答は活動後に匿名で提出する方法で回収し、17名全員から回答を得た。

参加した学生17名の内訳は1年生7名、2年生9名、4年生1名であり、それぞれの参加回数は1年生は全員が初めて、2年生は2回目が4名、3回目が5名、4年生1名は7回目の参加であった。

気仙沼市での学生ボランティア活動は2011年度から2016年度まで16回行われており、通算17回目となる今回の活動は、これまで継続して訪れている気仙沼市鮎立児童館と面瀬学童保育室において子ども会活動として行われた。

3. 研究結果

(1) 活動に参加した理由

活動に参加した理由の中で最も多かったのは、①「被災地の現状を知りたい」ということであり、17名中9名であった。その背景には、自身の体験からの関心や以前訪れてからの変化を知りたいということが綴られている。

次いで、②「自分にできることをしたい」ということを理由に挙げたのは5名であった。以前から被災地支援に関心を持ち、この活動があることによって被災地を訪れる機会を得ることができたという学生もいた。

今回初めて参加した1年生の理由はこの2点に集約されているが、2回以上の参加している学生の理由として挙がってくるのは、子ども達との関わりであり、③「子ども達に再会したい」という思いを挙げた学生が4名、④「子ども達が楽しく遊べる場を作りたい」という学生が2名であった。特に子ども達のまた来てねという言葉に応えたいという思いが活動の継続につながっている。こうしたことに関連して、被災地にボランティアが継続して訪れることの大切さを感じて、⑤「ボランティアの関わり大切さ」を挙げた学生が1名いた。(詳細は最終報告書参照。)

(2) 活動を通して自分の成長につながったと感じること

活動を通して自分の成長につながったと感じることとして最も多かったものは、①「被災地についての考えや理解の深まり」であり、7名が挙げていた。自分の目で直接見たり、現地の方の話を直接聞くこと、活動を契機に事前学習をした上で現地を訪れることが、被災地に対する関心を高め、自分の考えや理解を深めることにつながっていることが伺える。

次いで②「子ども達との関わり」を挙げた学生が5名いた。この活動では、子ども達と楽しい時間を過ごすことを大事な目的にしており、当日に向けた準備を重ねた上で訪問している。子ども達との関わりを学生達がかなり意識して活動に臨んでいることが伺えるが、これを挙げているのは、2回以上参加している学生達であった。繰り返し訪れることで感じられる自分の成長と言える。

また③「主体的な考えや行動への変化」を挙げた学生は3名であった。これも全員2回以上参加している学生達であり、語られている言葉からは、「被災地についての考えや理解の深まり」を通して、自分にできることを考えるようになっていたり、またこの活動の意義を考えるようになっていたりする。

そして④「繋がりを絶やさないことの重要性への認識」、⑤「防災に対する意識の変化」、⑥「自分の暮らす場所以外の暮らしを知ることの大切さ」が1名ずつ、それぞれ初めて参加した1年生から挙げられていた。実際に現地を訪れて地元の方々と交流することによって、自分が訪れたり、復興カフェを通してつながることが大切な活動であることを実感している。また、活動を通して被災地やその地域に暮らす人々に対する関わりだけでなく、自分自身に置き換えて自らの防災意識の高まりにつながっていること、さらには、他の地域の問題にも目を向けることの大切さを感じている学生がいた。この活動が被災地への関わりをきっかけに他の問題にも目を向ける機会となっていることが伺える。(詳細は最終報告書参照。)

4. 考察

被災地でのボランティア活動が学生達のどのような学びや成長につながっているのか。サービスラーニングの教育効果に関する先行研究と照らし合わせて考察を行う。

サービスラーニングの教育効果については様々な先行研究があり、中里ら(2015)は先行研究の整理により学生に対するポジティブな教育効果について、初年次教育、教養課程と専門課程に分けてまとめている。これに基づく初年次教育、教養課程における教育効果は、①学生が自信を獲得できること、②学習への動機づけ、③汎用的能力の獲得、④市民性の獲得。専門課程における教育効果は、①専門的スキルの獲得、②コミュニケーション能力の向上、③志望する専門職の役割の再認識である。

「学生が自信を獲得できること」という点では、先行研究ではサービスラーニングを通じた自尊心や自己肯定感の向上が指摘されており、今回の学生達の声に照らし合わせてみると、自分達が訪問することで、子ども達が楽しく過ごし、また来てねと声をかけてもらっていることや、被災地の人びとの話からボランティアが訪れることの大切さを聞くことによって、自分達の関わりの意義を見出している。自己肯定感につながっている部分であり、「学生が自信を獲得できること」として捉えられる。

「学習への動機づけ」という点では、中里ら(2015)は社会の一員として活動するサービスラーニングは、学生に知識習得の意義を認識させ、学習への動機づけを促進させるとしている。今回参加した学生達は、活動に際して自主的に被災地のことを学ぶ事前学習に取り組んでおり、また活動を通して被災地に関する理解の深まりや関心の高まりを感じている。こうしたことから「学習への動機づけ」という点でも重なりがある。

「汎用的能力の獲得」とは、活動後の生活スキルやアカデミックスキルの向上、他者理解、コミュニケーション能力、協調性、リーダーシップの獲得等のことである。今回参加した学生達の記述からはこうした点を読み取ることはできない。しかし、筆者自身が学生達の活動に同行して学生達が現地の子供達や様々な人びと、そして仲間達との接し方を見る限り、こうした能力を十分に有していると感じることが多くある。これはボランティア活動だけが獲得要因ではないと思われるが、多様な人びとと関わる経験は汎用的能力の向上につながる機会となるであろう。

「市民性の獲得」とは、地域の文化や歴史の理解、社会的責任感や利他的意識の向上等のことである。今回参加した学生の声の中には、自分に何ができるかを考えるようになっ

たという声が多く、社会的責任や利他意識の向上につながる記述があった。また、「被災地というだけで特別視するのではなく、その土地自体を知ることが大切だと感じた」という記述のように地域を理解することの大切さや「人があまりにもいない場所があったり大きな壁があったりと自分の暮らす場所とは大きな違いがあった。そういった違いを多くの場所で自分は知るべきだと思う。それがわかったことが自分の中で一番の成長だった」という記述のように、被災地支援に止まらない社会問題へのまなざしを獲得した学生もいた。まさに「市民性の獲得」につながる活動になっていると言える。

「専門的スキルの獲得」について、中里らは(2015)は専門的スキルの獲得に加えて、学生達がサービスマーケティングを通して授業で習得した知識の再確認を行う傾向にあるとしている。今回参加した学生達の中には保育コースに所属している者もおり、「話を要約して伝え直す方法をみんなで話し合う場において使用したり、子どもたちと同じ目線で話したり同じものを見てみたりなど授業で教わった内容を実際に使用することができた。これは自分の中で成長に繋がったと思う」という記述のように、大学での学びを活動に生かしていることが伺える。

また、「コミュニケーション能力の向上」についても、「子どもたちとの信頼関係を少しずつ築けるようになったと思うこと」という記述があるように、机上の学びだけでなく、実際に子どもたちと接することによる学びを学生が感じている。

「志望する専門職の役割の再認識」については、今回の記述から読み取ることはできない。しかし、学生達の活動後の振り返りに筆者が同席した際、訪問先の児童館や学童保育室の職員の方々の優れたスキルが語られていることがあった。学生達が企画して行うレクリエーションにも参加して一緒に盛り上げてくれたり、フォローが必要な子のサポートを行っている様子を見て、児童福祉関係の職場を志望している学生は、ロールモデルを見出していると思われる。また、こうした点から活動プログラムを考えると、今後、訪問している地域のソーシャルワーカーの話聞くことをプログラムに含めることも考えられる。

これらのように、本学で継続して行っている被災地での子ども会活動が、サービスマーケティングの場としても一定の教育効果につながっていることが伺える。被災した地域の方々にとってだけでなく、学生達の成長にとっても大切な機会になっていると言える。

ただし、活動を通して得られるものは多様であることが大切であり、特定の視点や考え方を押しつけるような活動になってはならないと考える。被災地で暮らす人びとの思いも様々であり、防潮堤の建設が必要だという人もいれば、反対している人びともいる。多様な経験を通して多様な価値観に出会い、自らの思考を磨いていくことによって、独善的でない主体性や協調性を獲得していくことが学生達の生涯を支えるものになると考える。こうしたことから、震災以降、学生達が丁寧に築いてきた関係性によるボランティア活動を今後も大学として支えていくことを大事にしたい。

Ⅲ. 熊本・水俣研修（斉藤くるみ）

1. 研究の目的と方法

東日本大震災以降にも、災害は次々起こっている。過去の経験は新たな災害に活かされ

ているのか、災害弱者への意識は変わっているのか等を課題として研修を行い、学生たちに広い視野の考察を求めた。（東日本大震災では障害者の死亡率は全体の志望何時の2倍であった。）また自然災害だけでなく人が起こした災害である公害というものについても学ばせた。

2017年7月30日～8月3日に地震と豪雨の被害に見舞われたばかりの熊本と水俣病の資料館にて研修を行った。参加者は聴覚障害学生4名、肢体不自由の学生1名その他3名であった。本学理事長潮谷義子理事長のご尽力で慈愛園や水俣資料館での見学が叶い、また車いすの学生も不自由なくすべてに参加することができた。障害をもつ学生が研修やボランティア、アルバイト等、学外での活動に参加することが、日ごろ難しいということを変え聴かされた。今後は積極的に障害のある学生に研修に参加させていきたい。

2. 研修の内容と考察（詳細は最終報告書参照）

7月30日に熊本到着後、熊本ライトハウスのぞみホームを見学させていただいた。視覚障害、聴覚障害、知的障害などをもつ成人の生活の場であり、多くが重複障がいをもつ人である。学生たちは、自分の歩幅で空間を認識している人たちのために物の位置は変えないこと、時計が見られなくても時間がわかるよう音声で情報を流していること等、視覚障害者のための配慮に特に感銘を受けていた。普段開いているドアが閉まっているというような些細な変化を感じ取ることができる視覚障害者の能力、そして点字を使った美術作品も作成されていることに驚いていた。なるべく自分で動くという環境ができている一方、単独で施設害に出ることは困難であるということなども聞かされて、臨場感を持って重複障害者の生活を感じることができた。

7月31日には、学生たちは県庁の図書室等、各自が調査を行っていた。また午後にはろう者で画伯である乗富秀人氏の講演を聴き、その後聴覚障害者センターに行き、震災被害についてお話を伺った。

乗富氏の講演ではろう者のアイデンティティをもつことが自信につながるということが強調され、ろう学生は特に深く受け止めた。また様々な環境のろう者がいることから、その手話も世代により、環境により様々で、自分の学力・学歴の意識を捨てて相手に合わせて支援すべしということばは学生の心に残ったようである。

8月1日には熊本学園大学の花田昌宣・同大水俣学研究センター長、黒木邦弘先生に講義をお願いした。学内の福祉避難所になった場所の見学、そして学外の仮設住宅や事務所にも足を運んだ。災地障害者支援センターくまもと事務局長で自ら車いすの東俊裕弁護士にもレクチャーをお願いした。事務所では猛暑の中遊び場のない子どもたちが狭い場所で走り回ったり、宿題をしたりして、楽しそうに過ごしていた。予想外の震災で福祉避難所を作ることは必須であったが、困難でもあったこと、大学という制約（火気が使えない等）を打ち破って大学を挙げて災害弱者を助けた様子を伺うことは、学生たちには多くの示唆を与えた。

8月2日、水俣に異動し、水俣資料館で「語り部の会」会長緒方正美氏の講演を聴き、その後、胎児性水俣病患者の施設「ほっとはうす」を訪問した。事前に熊本県庁の図書館まで生き、勉強を重ねてきた学生たちも、実際に患者さんたちと会うことは大きな衝撃があ

った。

8月3日慈愛園の各施設を訪問し、潮谷愛一氏と潮谷佳男氏に講義をしていただいた。介護施設、乳児ホーム、障害者施設をすべて見学することができ、その後、園の歴史を始め、社会福祉の原点に立ち返る講義を聴き学生たちは大変感動し、帰路「ことばにできないほど勉強になりました」というメールが届いた。

3. 考察

参加者にはアジア研修に既に参加している学生が3名いたが、自分の国での災害、その支援等について、あるいは自分の国で起きた公害について、学んだことは、学ぶ喜びを味わい、知識を広げ、さらに人権感覚を磨いた。現地を訪れることなしに、事前に研究するモチベーションは高まらなかったであろうし、現地を訪れて初めて学んだことが実感されたと思われる。

Ⅲ. おわりに

サービスラーニングの意義は語られてきたが、リベラルアーツ教育としてのサービスラーニングについては、日本ではあまり研究されていない。リベラルアーツ教育の大きな柱として人権と多様性の尊重がある。被災地でのサービスラーニングは、伝統と新たな事態のぶつかり合う中で、非日常に対処する柔軟性が問われる。人権と多様性を尊重しながら被災地支援に携わる社会福祉専門職たり得るかも、リベラルアーツ教育の成果が問われるところである。

Barber, Benjamin R, Battistoni, Richard, (1993), "A Season of Learning: Introducing Service Learning into the Liberal Arts Curriculum," *PS: Political Science and Politics*, 26- 2, 235-240.

Sigmon, Robert L., (1996), *Journey to Service-learning: Experiences from Independent Liberal Arts Colleges and Universities*, Council of Independent Colleges

Rimmerman, Craig A. & Mark D. Gearan, (2011), *Service-Learning and the Liberal Arts: How and Why It Works*, Lexington Books.

中里陽子、吉村裕子、津曲隆(2015)「サービスラーニングの高等教育における位置づけとその教育効果を促進する条件について」『アドミニストレーション』第22巻第1号、熊本県立大学、pp.164-181

文部科学省『大学教育部会の審議のまとめについて（素案）』「(2) カリキュラムや学修支援環境の充実」

http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo4/015/attach/1318247.htm